

2013年6月22日

スチューデントコンサートプログラム



☆ 鷺見五郎編：キラキラ星変奏曲

アンサンブルAクラス：バイオリン 傳法朋佳 木内さゆみ 鈴木新也 上野理生
松浦匡佑 安倍麻衣子 木村玲音 田中仰 傳法資生 高野慈 藤村茉莉香 高澤
徳成

ピアノ伴奏 後藤和香

☆ モーツァルト：4手のためのピアノソナタ ハ長調 KV19d 第1、3楽章

バスターン：ロンドファンタスティック

ピアノ 菅野菜穂（小5） 亀田遥（小5）

☆ モーツァルト：ピアノとバイオリンのためのソナタ ト長調 KV301 第1
楽章

バイオリン 傳法資生（小3） ピアノ 石山和暉（小4）

☆ モーツァルト：4手のためのピアノソナタ ハ長調 KV19d 第1、2楽章

ピアノ 跡邊彩貴（小6） 永倉実侑（中1）

☆ モーツァルト：ピアノとバイオリンのためのソナタ 二長調 KV306 第1楽
章

バイオリン 布川桃子（高3） ピアノ 藤村怜香（高2）

☆ ベートーヴェン：ピアノとバイオリンのためのソナタ 第4番 イ短調 Op.23
第1楽章

バイオリン 飯田拓斗（高2） ピアノ 遠藤龍軌（高3）

☆ パガニーニ：無窮動

アンサンブルBクラス：バイオリン 相澤久恋夏 江口航太郎 鈴木双葉 松浦昂汰
奈倉里穂 富田悠介 百々千尋 齊藤華音 相沢美月 千葉赴巳 松浦雅樹 大槻茉
莉子 布川桃子



プログラムノート

☆ 鷺見五郎編: きらきら星変奏曲

きらきら星変奏曲は、オーストリアの作曲家 Mozart が、1778 年に作曲したピアノ曲です。その正式な曲名は「フランスの歌曲『ああ、お母さん、あなたに申しましょう』の主題による 12 の変奏曲」で、これは Mozart が、当時フランスで流行していた恋の歌をもとに、ピアノ曲にアレンジしたのだそうです。

Mozart の没後、イギリスの詩人ジェーン・テイラーが、1806 年に発表した詩「きらきら星」とこの曲とが結びつき、それが世界的に広まって、今では「きらきら星変奏曲」という曲名が定着し、世界中で親しまれています。

この曲のメロディーは、日本においては「アルファベットの歌(ABC の歌)」としても親しまれ、誰もが口ずさんだことがあるはずです。

その「きらきら星変奏曲」を今日は、ピアニストでもあり作曲家でもある、鷺見五郎先生が編曲したものをお聴きいただきます。

この曲のテーマから始まり、それが、7 つのバリエーションに展開していきます。どうぞお楽しみください。

☆ モーツァルト: 4手のためのピアノソナタ ハ長調 KV19d 第1、3楽章

大好きなモーツァルトのこの作品は 9 才の時に作曲されたものと知って、とてもびっくりしました。はじめは自分のパートを弾くのに必死で、なかなか相手のことを考えて弾く余裕はありませんでした。でも 2 人で相談して軽やかにかわいらしく演奏できるように一生けんめい練習しました。今日は春のそよ風をイメージして弾いてみたいです。

次のバステインのロンドファンタスティックは音のかけあいが楽しい曲です。2 人の息をぴったり合わせて弾きます。どうぞお聴きください。

☆ モーツァルト ピアノとバイオリンのためのソナタ ト長調 KV301 第1楽章

モーツァルトはドイツの作曲家、ヨーゼフ シュースターのバイオリン ソナタに感心し、ピアノとバイオリンが平等にメロディをえんそうするという新しいかたちの作品を作曲しました。そして最初に出来上がったのがこのKV301です。

4分の4拍子、G-Dur で、Allegro con spirito(元気な)曲です。始めは明るくのんきなテーマで、バイオリンがメロディです。それから音が半音ずつ上がり、バイオリンとピアノの問答があり、はずむ感じのフレーズが続きます。そしてD dur にかわり、バイオリンとピアノの追い合いのようなフレーズがあり、前半が終わります。

その次はバイオリンとピアノのユニゾンで始まるけれども、不安げな8分音符が続き、a moll になります。それから、ピアノは16分音符で、一方バイオリンは長い音でさらに暗くなります。そして両方とも8分音符にもどります。

それから一変して明るいテーマに戻り、安心感が出てきます。と中の追い合いは D dur でなく G dur ですが、他の部分は前半と同じで、よいんを残して終わります。

☆ モーツァルト:4手のためのピアノソナタ ハ長調 KV19d 第1, 2楽章

この曲は、1765年モーツァルトが姉のナンネルと共演するため、ロンドンで書かれたものです。

おどろくのは、モーツァルトがわずか9歳のときの作品ということです。モーツァルトは、小さいころから才能に恵まれていて、神童とも呼ばれていました。

とても元気で子供らしさがある曲です。

連弾初体験の私たちは、呼吸を合わせるところから始まりました。

同じ鍵盤を弾くところがあり、指を上下交差に動かすなどの工夫が必要でした。

今日は9歳のモーツァルト、14歳のナンネルを思い浮かべながら演奏します。

☆ モーツァルト:ピアノとバイオリンのためのソナタ ト長調 KV306 第1楽章

この曲はモーツァルトが、1778年にパリで作曲しました。若い頃モーツァルトは主にピアノメインの曲を書いていましたが、この時期の曲はヴァイオリンとピアノが互角になっています。

軽やかさやピアノとヴァイオリンのバランスを考えるのがとても難しく、モーツァルトらしさを出すのに苦労しました。特に大変だったのは、曲全体に軽快さを持たせることでした。

曲を作り上げていくなかで、自分たちで考えたり、自分のパートのみでなくお互いの音をききながら曲を構成していったことが、とても勉強になりました。

☆ ベートーヴェ:ピアノとバイオリンのためのソナタ 第4番 イ短調 Op.23 第1楽章

この曲は、作曲者4作目のもので、初めての短調ソナタです。今回はお互いが忙しい中、日程をあわせることが大変で、コミュニケーションの大切さをあらためて学ぶことができました。とても美しく激しい曲なので男二人で楽しく弾きたいと思います。どうぞお聞きください。

☆ パガニーニ:無窮動

ニコロ・パガニーニは、ヴァイオリニスト、ヴィオラ奏者、ギタリストであり作曲家です。

1782年にジェノヴァ共和国(イタリア)に生まれ、1840年にフランスのニースで亡くなりました。57歳でした。

パガニーニがヴァイオリンを弾き始めたのは5歳の頃からで、13歳になると学ぶべきものがなくなったと言われ、その頃から自作の練習曲で練習していました。それらの練習曲は、ヴァイオリン演奏の新技法、特殊技法を駆使したものと言われます。

彼のヴァイオリンの演奏があまりにも上手いので、悪魔に魂を売り渡した代償としてあの技術を手に入れたのだ、と言われたそうです。そのため、彼の出演する演奏会では、聴衆は本気で十字を切ったり、本当にパガニーニの足が地についているか、彼の足元ばかりを見ていた観客もいたと言います。また、病弱なため、痩せていて浅黒かったので、そのことも伝説に貢献したそうです。

ちなみに、彼が演奏するのに使用したヴァイオリンは、1742年にガアルネリ・デル・ジェスが製作した「カノン」が有名です。

また作曲の面では、パガニーニは自分が上手いから、これでもか！というほど難しい技術でてんこ盛りにした曲集を書いたそうです。

そして、今回演奏する無窮動とは、常動曲とも言われ、作曲手法の1つです。常に一定した音符の流れ(休みなし)を特徴とし、通常は急速なテンポによる楽曲、または楽章のことです。無窮動は19世紀末まで人気の頂にあり、アンコールで演奏されるときは決まって何度も繰り返し、その度に加速して演奏したそうです。

この曲も文字通り休符がなく、最初から最後まで16分音符の曲です。プロが演奏すると、たったの4分。とても短い曲ながら、音符の数は全部で約3000もあるそうで、これには驚きました。練習では、音符を追うことで精一杯でした。目が回るようなスピードとまではいきませんが、集中して演奏します。

どうぞお聴きください。(大槻茉莉子)

